

ぷるるん種付けおじさんめ

調教団誌



おしとやかで芯の強かった伝説のグレイドモ
千〇ホを唾ええる事しか頭がない
エツ千なメス犬になりました♡





メルフさんが行方不明になった……

スペルビア帝国皇帝、ネフェルさんから直々の依頼で

私とレックスは捜索にあたっていたが、手がかり一つ見つからず、


一年が過ぎていた……

メルフさんのブレイド、カグツチが健在であることから、命は無事だ
という事がわかっているのが唯一の救いだった。

その日も引き続き、レックスと手分けして聞き込みをしていた私は
とある中年の男に声をかけた所で意識が途切れてしまった……



眠らされていた私は見知らぬ部屋で目を覚ました。
未だ靄のかかる頭で現状を確認する……
どうやら衣服を脱がされて、椅子に縛り付けられているようだ……
それも股が大開きになるようなとても恥ずかしい恰好で……



お、目を覚ました
みたいだね。

体調はどうかかな？

そして目の前いた私を攫っただろう
小太りの男が、朗らかな声色で、私の
警戒を意に介さず話しかけてきた。

……ここはどこですか？
この拘束を解いてください

「それはできない、私はこれから君を喜んで男の性処理をするメス犬に調教するんだからね」

目の前の男はそう、正気を疑うような事を言った。

「私が……メス犬？バカな事を言わないで」

私はレックスのブレイド、その絆はこんな男に壊されるようなものじゃない。

「じゃ、とりあえずこの画面を見てくれる？」
そう言って光る板状のものを掲げてきた、
突然だったので思わずそちらに視線をやってしまった……





その瞬間、光る板から超音波のようなものが
発せられた。

それを見た私の頭は更に深い靄がかかった様
に怠くなり、全身が心地よい倦怠感に包まれた。

ボーつとする頭の中で男の声は不思議と良く通って聞こえた。

ずっと聞いていたくなるような声だった……

男が言葉をささやくと「その通りだ」と思いたくなるような

心地よさだった。

男が言葉を発する度に下腹部に快感がキュンツと響く……♡

ホムラちゃんは
とってもエッチな娘だよ。

ビーン

アハア……♡

男に身体を触られると
嬉しくて気持ちよく
なっちゃうんだよね。

ビーン



待っててレックス!

私は必ず脱出して君の下に帰るから!

こんな催眠なんかには私は負けない!

男に犯されるためなら
なんだってしちゃう

シツポを振って男に媚びる
ホームラちゃんは浅ましい
発情期のメス犬だよ





フ
ン♡

ア
ン♡

キ
モ
ク
イ
イ
!

マ
ン♡
ス
ゴ
ッ♡

フ
ン♡

ポ
ッ♡

ポ
ッ♡

ポ
ッ♡

ポ
ッ♡



助けて
レックフスー!
レックフスー!

ブルン

ブルン
ダメッ
イッちヤ

ダメッ
マッ
マッ

ズ
バンッ
バンッ

ズ
バンッ
バンッ



まだ彼氏の名前を
叫べるのか...

催眠で理性なんて
とっくに飛んでる
だろうに...

レックス君との
絆がそれほど
強いのか...

...今後の調教に
支障が出そうだ、
荒療治といくか...

男に犯された翌日、ガンガンに響く頭痛にうなされながら目を覚ました私に「いいところに連れて行ってあげるよ」と告げ、男は問答無用で私を連れ出した……

昨日犯された時の紐のような卑猥な水着のまま連れ出される私は恥ずかしさの頂点に達したが、それ以上に目の前の光景に啞然とした。

街をいく人々、その女性が皆私と同等かそれ以上に卑猥な恰好をしていたからだ。

それどころか往来の中心で事に耽る男女もいた……

「そっぴや言ってなかつたね」

「ようこそ、種付けおじさんの世界へ」

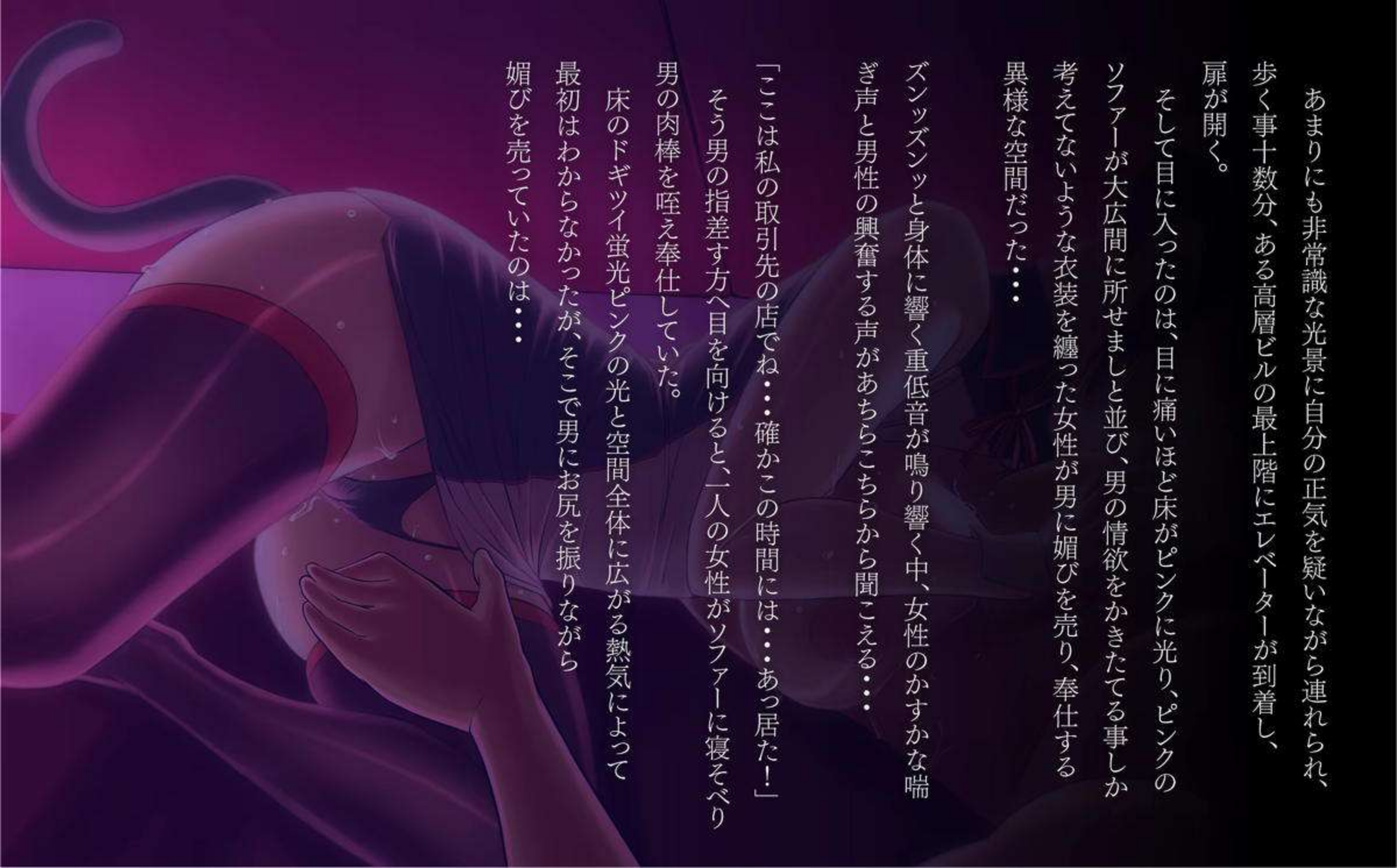
あまりにも非常識な光景に自分の正気を疑いながら連れられ、歩く事十数分、ある高層ビルの最上階にエレベーターが到着し、扉が開く。

そして目に入ったのは、目に痛いほど床がピンクに光り、ピンクのソファアーが大広間に所せましと並び、男の情欲をかきたてる事しか考えてないような衣装を纏った女性が男に媚びを売り、奉仕する異様な空間だった……

ズンツズンツと身体に響く重低音が鳴り響く中、女性のかすかな喘ぎ声と男性の興奮する声があちらこちらから聞こえる……

「ここは私の取引先の店でね……確かこの時間には……あつ居た！」
そう男の指差す方へ目を向けると、一人の女性がソファアーに寝そべり男の肉棒を啜え奉仕していた。

床のドギツイ蛍光ピンクの光と空間全体に広がる熱気によって最初はわからなかったが、そこで男にお尻を振りながら媚びを売っていたのは……





メレフ……さん……？

ゴボゴボ♡

ゴボゴボ♡

ゴボゴボ♡

ス♡

ス♡

フ♡

フ♡

メレフさん！
私です、ホムラです！

ずっと探していたんです！
一緒に帰りましょう！

ピタッ



こんな事やめて！
一緒に逃げましょう！

ネフェル皇帝も
心配してましたよ！

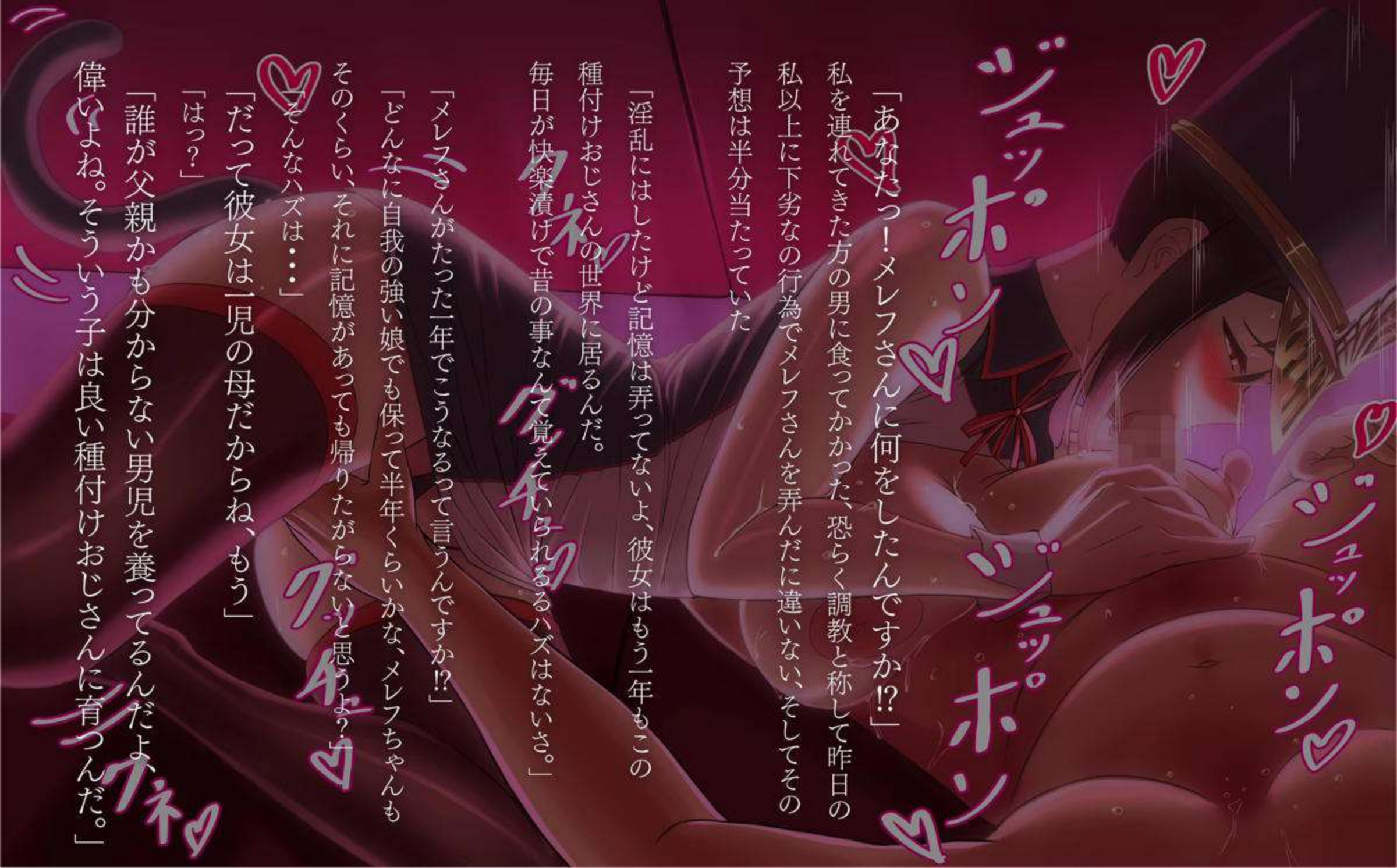


ネ・・・フェ・・・ル・・・？



.....ッ
!?





「あなたっ！メレフさんに何をしたんですか!?!」
私を連れてきた方の男に食ってかかった、恐らく調教と称して昨日の私以上に下劣な行為でメレフさんを弄んだに違いない、そしてその予想は半分当たっていた

「淫乱にはしたけど記憶は弄ってないよ、彼女はもう一年もこの種付けおじさんの世界に居るんだ。」

毎日が快樂漬けで昔の事なんて覚えていられるるハズはないさ。」

「メレフさんがたった一年でこうなるって言うんですか!?!」

「どんなに自我の強い娘でも保って半年くらいかな、メレフちゃんもそのくらい、それに記憶があっても帰りたいがらないと思わよ?」

「そんなハズは……」

「だって彼女は一児の母だからね、もう」

「はっ?」

「誰が父親かも分からない男児を養ってるんだよ、偉いよね。そういう子は良い種付けおじさんに育つんだ。」

♡♡
ゴクッ♡

♡♡

ゴクッ♡

ド

ビュ

!

ビクッ

ビクッ
ビクッ

頭痛がひどくなってきた……

男と口論しているうちにメレフさんの奉仕で啜えられていた男が
射精していた。

私だったら思わず吐き出してしまっただろうその精液を、メレフ
さんは愛おしそうに飲み干し、飛び散った一滴まで舐めて男の
肉棒を綺麗にしていた。

「おっ！終わったみたいだね。」

じゃあメレフちゃん、いつものやつ頼めるかな？」

まるで仕事仲間に頼み事をするように男は言った。

メレフさん……
正気に戻ってください……

男に拘束され、メレフさんの乳首を啜えさせられる……
「いつものやつ」とは授乳らしい
メレフさんが下品でいやらしい笑みを浮かべながら、私に啜えさせた方の乳房を揉みしだき始める……

ハァ……♡うづ

うづ

ハァ……♡

ムニョ♡
ムニョ♡

大丈夫♡
私のミルクを飲めば
不安も感じなくなるさ♡



揉み始めて直ぐにメレフさんの乳首から母乳が溢れてきた。思いのほか勢いがあり、喉の奥に入ってきたため、思わず飲んでしまった。

この行為に一体何の意味があるのか、疑問だったが、それも直ぐに思い知る事になった。

ピクピク♡

アハア♡♡

ピクピク♡

オホオ...

ゴクッ

ゴクッ

トポ

トポ

グニョウ

アアア

グインツ

「あ、あついー！身体が！胸が！アソコもおアツいいい!!」

メレフさんの母乳を飲まされて直ぐに身体中に異変が起きた。

胸の奥から乳首の先端までがむず痒く感じ、強く揉まずにはいられない。

アソコに至っては何もしていないのに潮を吹き始め、この股座に何も

挿入られていないことがおかしい事かのように空虚感に襲われている。

いつの間にか自分の指でかき回し、ほじくり返すかのように弄っていたが、

それで満たされることはなく、それでいてこれまで感じたことのない

快感が全身を駆け巡っていた。

「ナニこれっ!?なんですかコレえ!」

「んっふふふ！いつ見てもすごいなあコレ！」
男が笑いを堪えきれないという風にしゃべり始める。

「メレフちゃんは私の最高傑作の二人でね、彼女の母乳は即効性の
催淫効果を持つてるんだよ。体液の変質調教の賜物でね、でも中々
適正のある人材は見つからないんだよ！」

男は自慢をするように解説を始めるが、コチラはそれを聞いて
いられる余裕はない……

「た、助けて！何とかしてえ！」

「十時間くらいぶっ通しでオナニーし続ければ収まるよ」

ほら、メレフちゃん♡

「ご主人様♡んちゅ♡んちゅ♡」

十時間……今の私にとっては気が遠くなるような時間だ、そしてその
私に見せつけるように二人はディープキスを交わし始めた……



オッ♡

オホオオ♡

ハッ♡

オホオオ♡

ハッ♡

ブム♡

ズバ♡

ズバ♡

ブム♡

ズバ♡

ズバ♡

アハ♡

もうなんじかん経った？わかんたやい……にかい朝になった……

ズッぽとズッぽと私はおチ○ポハメハメしやれてりゅ……♡

からだ、ドキドキとまりやない……メレフしゃんがズッぽとよだれとミルク
のませるからだあ……♡

おふとんベトベトお……ごしゅじんしゃまのザーメンとホムラの愛液

であふれるから……♡

プッ♡

でもメレフしゃんがまたとりかえてくれりゅ……♡メレフしゃん

しゅきい……♡

ブルン♡

アッ♡ごしゅじんしゃまのおチ○ポまたおつきくなった♡

またザーメンびゅっびゅっホムラのおまんこにしてくれるんだあ……♡

んっ♡パンパンはげしっ♡おチ○ポ♡ごしゅじんしゃまチ○ポしゅきい♡

オッ♡

ギョッ♡

ブルン♡

オホォー♡

アッ♡

ハッ♡

アッ♡

ハッ♡

ザーメンきたあ♡あつつくてどりよどりよお♡ごしゅじんしゃま

なんかいもだしてりゆのこしゅごいら♡もうずっとイキっぱなしなのに
また「イクウー！イクッイクッ♡レ、レックシユ！ごめんなしい♡」

ト……アハア♡

れつくすにごめんなさいしながらイクのおおぼえちやったあ♡

れ、れつく……れつく……れつくしゅ……れつくしゅ！

お、おぼえてる……れつくしゅおぼえてるう……♡

ビクッ♡

アヒッ♡

ビクッ♡

ビクッ♡



一年後

ド
ソ
ト

ド
ソ
ト

ド
ソ
ト

♡
ロ
♡

♡
ロ
♡

♡
ホ
♡

♡
ホ
♡



ピンクに怪しく光る床、所狭しと並べられたピンクのソファ、ズンツズンツと身体に響く重低音の中にかすかに聞こえる女の喘ぎ声、久しぶりにこの店に来たが、どうやら繁盛しているようだ。

まあそれも当然だろう、この店に卸した二人でツートップ看板として非常に人気ができるのは調教した私が一番分かっている。

今日はその二人、ホムラとメレフの様子を見にきたのだ。

ホムラはそのおしとやかな優しさが受け身で優しくされたい

男性に人気らしい、確かに優しく包み込むような手コキ、優しく舌を

這わせ、ゆつくりと刺激するこのフェラテクは射精を堪えきれない。

ここの仕事で磨いたものだろう。

メレフは変わらず積極的に身体を密着させ、お互いの体液を混ぜ合わせるようなプレイスタイルは素晴らしい。

自分の強みを良く分かっている。

それでいて程よいタイミングで飲み物を手配するなど、気配りが上手い。

なによりここでの仕事を楽しんでいるようだ、心配はいらないだろう。



「そーういやホムラちゃん、一人目身籠つたんだって? おめでとーう!」

「ありがとーうございませしゅ♡」

「父親は誰かわかってるの?」

「え、ええつと…そのお…わかりませえん♡でも、男の子ですう♡」

「そっかー! そういう父親のわからない男の子はね、良い種付けおじさんになるという言い伝えがあるんだよ! 大きくなるのが楽しみだね!」

「はい♡」

「メレフちゃんも色々おしえてあげなよ。もうヤツてるんでしょ? 性教育」

「ええ♡、もう毎日ヤンチャばかりで♡」

「そうかそうかあ、もし大きくなったらウチに来させるといい、私が

色々手ほどきしてあげようじゃないか」

「それは…私の身が保ちそうにありませんね♡」

「よし、そうだ、ホムラちゃん、レックス君にこの事を報告しにいかないかい?」



ズット

ズット

♡ロ♡

♡ホ♡
♡ホ♡

「ふえ……れつく……す?」

「……」

「ははは、ごめんごめん!私の知り合いの男の子だよ!」

「ごしめじんさまの知り合い……おチのポおつきいですかあ……?」

「ん〜どうだろうね?私よりは大きくはないかもしれないけど、ホムラちゃんが大きくなるようにシゴいてあげたらいいんじゃないかな?」

「も〜♡わたしそんなに厳しくしないでですよ〜♡でもレックス君か〜」

カッコイイ子だといいなあ〜♡」





















































